

比島バターン攻略戦

滋賀県 岸本 栄太郎

農家の子供男四人女の末っ子として、大正七年八月生まれの私は、昭和十三年の兵隊検査で甲種合格となり、翌十四年一月京都の歩兵第九連隊に入隊しました。

同年兵の大半は四月と八月に中支方面へ行きました。が私等七人は残されました。

私は射撃と銃剣術が得意で、隊内でも有数だったのが教育要員として残されたのだと思います。残された七人も比島で三人が死に、あとの者もどうなったのか、戦友会を毎年やっていますが残された七人の中では出席は私一人だけです。

昭和十五年には皇后陛下が京都御所に行啓された時に儀仗衛兵として御所で勤務したことがあります。当時の第十六師団長は、あの有名に石原莞爾中将でした。

が、昭和十六年三月東條首相に生まれ予備役に編入されたので、後任に森岡中将が着任され、開戦直前の十一月十九日、大阪港から南方に向けて出港したのです。

今から思えば十二月八日の二十日も前に開戦準備が進められていたのですね。出征を控えて面会が許されたので家に連絡したのですが面会の当日になっても誰も面会に来てくれないんです。面会所には多くの家族が別れを惜しんでいるのに自分だけが取り残された形になりました。そのうちだんだん腹が立ってきて薄情な親なら子供でもないと別れの手紙に写真を入れて家に出して親を恨んだものでした。

戦後復員してから判ったことですが、田の取り入れの真最中のため三日遅れて母親が京都に来たら、息子は既に出征して京都にいないといわれ、ガッカリしてその場にヘタリ込んで泣いて泣いて仕方なかったそうです。

第十六師団第九連隊第二大隊第七中隊に所属して大阪港で「仁山丸」という輸送船に乗り込んだのです。

工兵隊も一緒でした。船内は学校の講堂みたいで船がゆれると床に敷いたゴザがザザーと滑り出す始末です。敵の空と海からの襲撃を警戒して船首船尾に立哨南に進路を取りました。

昭和十六年十二月一日台湾基隆港に入港、八日には開戦を知り武者振るいしたことを想い出します。十八日台湾出発、比島リンガエン湾に向かいます。二十二日上陸ですが普段波の静かな筈がその日は波が荒く工兵隊の操る上陸用舟艇に移るのに苦労しました。波が船を持ち上げた時に飛び乗るのです。それに上陸地点が夜間のため敵陣に近い所だったので損害も出ました。輸送船を離れて五百メートル進み海岸より百メートルも手前で救命胴衣を着け、銃を頭上にかかげながら海に飛び込み、ビュンビュン敵弾が飛ぶ中を必死になつて海岸にたどりついたのです。

第九連隊は師団主力と離れて第四十八師団と行動を共にすることになり、上島支隊となりました。第四十八師団は台湾編成の当時日本では数少ない機械化兵団として有名で、自動車の乗つての行軍ですから、我々

歩兵部隊は身の不運を嘆いたものです。上陸後直ちにマニラ占領のためマニラに通じる二本の道路を、それぞれ進むことになり第九連隊（上島支隊）は敵の待ち構えるタルラックという町に向かって百キロの道を徒歩で進軍しました。

第四十八師団は別の道を上島支隊と競争する形でマニラに向けて進んだわけです。上島連隊長は第四十八師団に負けるなど強行軍を命じ、途中、自転車部隊を編成して急進撃を続け、見事に第四十八師団より早く目的地タルラックに着いて敵と激戦数時間でこれを破つたのです。一日平均二十二キロの進撃はナチス独軍の電撃作戦にも勝るとの評判でした。

残念なことに上島良男大佐は勝ち戦の汗を樹陰で拭っている時に敵の流れ弾を受けて戦死されました。後任に武智大佐が就任しました。

マニラに攻め入る途中、米軍がバターン半島に逃げこむのを無視してマニラ攻略だけを目標にしていたのですから、後日手痛い目にあうことになっていたのです。

比島制圧のガンになってきたバターン半島を片付けようとは簡単に考えた上の方の人は、精銳の第四十八師団をジャワ方面に転出させてしまったので、第十四軍は止むを得ず、今まで各地の警備に当たっていた予備役の老兵で編成した第五十六旅団（奈良中将）をバターン作戦に注ぎ込んだのです。気の毒なのは奈良兵団でした。第十四軍の用意したバターン半島の地図は古い二十万分の一人で役に立たない。旅団の火力は旧式の山砲四門だけ重機関銃は一大隊に六銃しかないといふ、ひどいものでした。

第九連隊も一緒に戦う予定だった第四十八師団が急にいなくなつて、代わりにオッサン部隊と共同作戦しなければならなくなつたわけですからこれは大変だなあと思つたが、いづれにしても敗敵を討伐する位にしか思つていなかったのです。

一月九日、先づナチフ山の敵陣を奈良兵団が攻め立てたが、物凄しいジャングル地帯で、鉄条網に囲まれた機銃陣地が堅固に作られ、その上に防衛線の前面はことごとく事前に照準されており、十五センチ榴弾砲は

ねらい違わず我軍を撃つてきました。しかも弾は無尽蔵に射つてきたのはびっくりしました。

こちらはジャングルの中に逃げ込んだが、そこにも砲弾がとんできて全く逃げ場を失つていました。あとで調べたら、あちこちに集音マイクが仕掛けられ、その場所は大砲の照準が決められていたそうです。なお半島は戦前から敵が演習場として攻防戦の訓練をしてきた所だったそうですから敵の庭先のようなところで地理不案内の者が手さぐりで飛び込んで勝てる筈がなかつたというものでした。

我が軍が敵陣の備えが判らず困っていた二月中旬、マニラ市役所の地下倉庫で偶然見つけた敵陣の青写真を見た参謀がビックリ仰天したそうです。

武智支隊は奈良兵団の側面を攻撃するためジャングルを切り開きながら進んだが、一日にわずか百メートルしか進めなかつた。山ヒルの来襲にも悩まされ夜は樹の股にまたがって寝ました。食糧も欠乏し飛行機からの投下物はジャングルに阻まれて地上に届かなかつた。じゃが芋を腹一杯食べた夢をよく見たものです。

一月下旬ようやくナチブの堅陣を突破した兵団は勇んで敵の第二線陣地であるサマツト山の堅陣に立ち向かったのですが、忽ち壊滅的打撃を受け三分の二の兵力を失って後退せざるを得なくなりしました。その頃、前述の青写真が発見され我軍の首脳部は青くなったといわれ、作戦の中止が決められ、改めて本格的な攻撃が準備されることになったのです。

ある時中隊の横川少尉の将校斥候がやられたとの報が入り私の分隊十五名が救援を命ぜられました。夜になると敵は照明弾を打ち上げ我軍の夜襲を警戒してました。とにかく敵の弾がくる方向に行けば見付かるだろうと進みました。建物は崩れ落ち身をかくすものが無い。道端の溝に潜みながら現場にやっとたどり着いたら「ウーン、ウーン」とうなり声があちこちでしている。敵はなぜか逃げる気配がない。夜でもやたらと撃ってくる。身動き出来ないので小便もタレ流しだ。二日目になって敵味方の砲弾の谷間に入ってしまったときはモウ駄目だと思いました。やっと死体を収容し死者の銃を集めて中隊に帰り着いたら何故か中隊長の

御機嫌が斜めだった。こちららは死ぬ思いで帰ったのになんだ、と憤慨したが恐らく山本（旧姓）分隊玉砕と上に報告でもしたあとに帰ったものだから引込みがつかなくなって機嫌が悪かったのかなあと思ったが、上の者は勝手なものだ、兵隊だけが馬鹿を見るとつくづく思ったものでした。死体を焼いて缶詰の空き缶に入れ、首からブラ下げてさらに進軍しました。

もう一つ恐ろしい目にあいました。竹やぶが敵陣で途中から折れてしまう程の激戦の時、一個小隊が敵前で全滅したので死体収容に行くと命ぜられ、死ぬ思いで行って見ると鉄条網に引掛かって全滅してました。地雷で鉄条網を爆破して敵を撃退せねば死体収容が出来ない。

壕を掘って前進し決死隊となって敵陣に突入しようとした寸前に作戦中止引き揚げるとの命令でやれやれ命拾いしたわいとホッとした想い出があります。

開戦以来初めて第十六師団に復帰して間もなくバギオの近くにあるマヨン山の温泉で傷病兵四十名の引率者になって四十日間休養させてもらった（武智連隊長

は十一月二日戦死されました。

私は昭和十七年十二月除隊となり教習に凱旋しました。その頃はまだ戦勝気分があつて大歓迎を受けました。家へは出征時のこだわりもあつて全く連絡せずいきなり帰つたのでびっくりしたようです。仏壇には影膳が供えてありました。除隊後、大津の山添翁條という飛行機の部品を作る軍需工場に勤め、組長から班長と出世して五十人の工員を使つていましたので、終戦まで召集はありませんでした。このため私は結局実役で丸四年間軍隊にいたこととなります。終戦後は岩本家に養子に入り、山本から岸本に姓が変わりました。農協組合長等を歴任し、現在は草津市の農業委員や町内会長をやっています。

フィリピン生き残り

盟兵団の通信兵

秋田県 鈴木寅吉

私は大正七年一月七日、秋田県山本郡二ツ井町小掛字沢田の農家で生まれ、父に付いて樺太へ五年ぐらい、満州に七年いました。木材の仕事をしたり、道路造りしたため土木作業に転向しました。満鉄の下請けなど、林野局出張所の森林鉄道の路盤工事をしました。

昭和十三年徴集だが、小学生の時、高い所から落ちて、右腕が上がらないので補充兵でしたが、昭和十九年三月十五日、秋田市の東部第五七部隊（歩兵第十七連隊留守隊）に教育召集を受けました。検閲後、営内で充員召集となり、一晩で弘前へ。翌日、完全軍装で臨時列車に乗り広島まで行ったのだが、暑いのには防護上窓の鑑戸は閉めたままでした。

一週間、宮本旅館に泊まり、その間、上陸演習とか、